

大報恩寺（千本釈迦堂）

【伝説/平安/北野・西陣】

真言宗大報恩寺の本堂である千本釈迦堂は、京都に現存する最古の木造建築物です。国宝に指定されているこの仏堂は 1227 年に建てられ、今でも人々の心を掴んでいるある逸話の舞台となりました。

その物語によると、この寺院の建築を担当した棟梁は、建築の途中で大きな失敗をしてしまいました。建築構造で最も重要な柱の 1 本を誤って短く切りすぎたのです。そのような柱に使える大きさの頑丈な木は手に入れるのが困難だったため、棟梁は途方に暮れました。

自らの過ちに苦しんでいる棟梁の傍らで、妻のおかめは簡単な解決策を思いつきました。彼女は、すべての柱を同じ長さに切り揃え、枅組をその上に据えることで高さを補うことを提案しました。棟梁はおかめの案を採用し、千本釈迦堂は期限までに完成しました。

しかしおかめは、夫の失敗や、自分が助けたことを誰かに知られることを恐れて、夫の評判を守るべく自殺しました。この悲劇が明らかになった後、その犠牲を称えて、おかめは大報恩寺の敷地内に祀られることになりました。

今日に至るまで、建設作業に携わる人々の多くが、建設工事前に大報恩寺に参拝しています。夫に対するおかめの愛情により、おかめの人形が数多く置かれている大報恩寺は、結婚や家族の幸運を願う人々にとっても人気の場所となっています。